

---

# 群衆

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

群衆

### 【著者名】

N0436E

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

かつてのフランスアンジェ近辺のある街。そこで人々から偏見の目にさらされようと彼等の為に尽くす老人がいた。やがて街に病がはびこり。群衆心理をテーマにしました。

# 第一章

群衆

彼等がどうしてここにいるかといつと多くの者はそれを知らない。それはどうでもいいことであった。

しかしこれだけは言えた。彼等が市民達にとつて忌み嫌われる存在であるということだけはだ。アンジュ近郊にあるこの街においては異邦人である彼等はそうした存在であった。

特に彼等が何かをしたというわけではない。それどころか老人は医者として人々を治療し養子の少年はそんな彼を慕つて養子に入つて弟子入りしたのである。しかし人々はそんな彼等を理解することはなぞなく魔術師だの悪魔の使者だの言つて忌み嫌つていた。教会がこれを言つたわけではない。それどころかこの司祭であるミラボー司祭は彼等に対して好意的でありその医術の腕を高く買つてさえいた。しかしそれはあくまで彼個人の好意でしかなく民衆はそんなことは信じたりはしなかつたのだ。

「あの爺は魔術師だ！」

「いや悪魔だ！」

何かあればこう叫ぶのである。そして手に手に物騒なものを持って市庁や司祭のいる教会にまで押し掛ける。司祭はその度に彼等を宥め鎮めるのであった。

「あの老人が何をしたというのだ」

「あいつは悪魔だ！」

「人を食う！」

そうした噂が実際に流れていた。

「悪魔に魂を売ったんだ！」

「何時かこの街も悪魔に！」

「では聞こう」

司祭はそんな彼等の前に立つていつも聞くのであった。

「その証拠はあるのか」

「証拠！？」

「それは」

「ないな」

ここで厳しい声で彼等に対して言つのであった。

「そのような証拠は」

「それはそうですが」

「ですがそれは」

「証拠はないのだ」

またそう民衆達に対して言つ。

「何もな。ましてや」

「今度は何でしょか」

「市長殿もあの老人には感謝しておられるではないか」

「それは」

民衆はそれを否定しようとすぐがその通りであった。確かにこの街の市長もその老人には感謝の意を述べているのだ。積極的に人々の病を治してくれる彼に対して感謝こそすれ怨みに持つ筈がなかつたのだ。これは為政者として当然のことであった。

「現に助かった者達もいる」

また民衆達に言つた。

「そうではないのか？」

「それはそうですが」

「ですが」

確かにそうした者達もいて実際に老人に対して感謝して尊敬している。しかしそれはあくまで一部でしかなく街の殆どの者は老人を異邦人であるが故に恐れ憎みそうして偏見に満ちた目で彼を見ていたのである。これを僅かな者達が止めることは不可能であり司祭にしろ神の教えを後ろにしてからうじて彼等を押し留めているのが現実であったのだ。

そうした状況であった。老人が助ける者達も確かに増えていって

いるがそれ以上に彼を憎む者達が増える方が遙かに多かつた。それが現実であつたのだ。

「あの御老人は悪しき方ではない」

言い聞かせるような言葉であつた。

「それをわかるのだ。いいな」

「ですがまさか」

それでも民衆達は納得しない。それで司祭に対して問うのであつた。

「それもまた惡魔の隠れ蓑であれば」

「そうだよな」

誰かのこの何氣ない言葉が民衆の不安をさらに煽り立てるのであつた。

「若しそうだつたら」

「俺達はいざつて時に」

「いい加減にするのだつ」

何とか荒わけないようにしたがそれでも限度がある。司祭の言葉は強いものになっていた。

「そうして疑うのは神の御教えなのか」

「それはその」

「それは」

「そうだな」

今回も何とか彼等を止めにすることができた。止めてからまた言つたのであつた。

「人を疑つてかかればきりがない」

「ええ

「確かに」

「だからだ。疑うのは止めにするのだ」

穏やかな声に戻つてこう彼等に告げた。

「わかつたな。それでは今は」

「今は

「帰るのだ」

彼等に對して帰るよ<sub>リ</sub>うに促すのであつた。

「いいな。そうして氣を鎮めるのだ」

「わかりました」

「今は。それじゃあ

彼等はまだ慄然としていたが司祭の言葉を聞かないわけにはいかなかつた。司祭もそれをわかつていて彼等に言つたのである。彼としてはあまり好きではない方法であつたがそれでも今は使わないわけにはいかなかつた。老人を護る為にである。

民衆が去つていく。司祭はそれを見ながら溜息をつく。それは一度や二度ではなかつたのである。過去に何度もあったことなのだ。

「全く」

言葉にも溜息がこもつてゐる。

「こんなことが何時まで続くのだ」

そう思いながらある場所に向かう。そこは老人と彼の養子であり弟子でもある少年がいる家だ。質素で何の派手さもない貧しい一軒家である。一人はそこに静かに住んでいるのである。家の前まで来ると扉をノックする。そして家の中に声をかけた。

「司祭様ですか?」

「はい」

司祭は家の中の声に對して答えた。

「私です」

「はい。どうぞ」

穏やかな声であった。その声と共に扉を開ける。家の中から白く長い髪を持つている老人と優しい顔を持つ少年が出て來たのであつた。

「ようこそおいで下さいました」

「さあ、どうぞ」

一人はその穏やかな笑顔で彼を出迎えて家中に導き入れる。家中も實に質素で最低限の家具の他は何もない。司祭を粗末な椅子

に座らせ水を出したのであった。

「生憎ですが」

老人は水を出したところで司祭に対してもうさうと言つてきた。

「ワインもビールもありませんので」

「いえ、それは」

司祭もまた穏やかな笑顔になつっていた。その笑顔で老人に対して答える。

## 第一章

「構いません。水には水の味があります」

「そうですか」

「私は水が好きでして」

「こうも言つのであつた。

「それを頂きたいと思います」

「水には水の味がある、ですか」

「そうです」

また答えるのであつた。

「ですから。それを有り難く頂きます」

「味気ないとは思いますが」

しかし老人はまだこいつ言つのであつた。

「この水は」

「またそれはどうして」

「一度湯にしてあるのです」

「湯にですか」

「そうです。どうも東の方では一旦水をそうしてから飲んでいるよ

うなのです」

彼はそれを知つてゐるのであつた。

「その方が水にあたらないからと」

「ふむ、初耳ですな」

「いえ、本当かどうかわかりませんが」

一応はそう前置きはする。

「ですが。実際にそうすれば井戸にいる虫を気にしなくて飲めますし」

「そうですね。それを考えれば確かに奇麗です」

「奇麗にするのに限ります」

それが医者としての彼の考え方であつた。

「その方が病になりませんので」

「左様ですか。いや、全く」

そこまで聞いてあらためて老人に対して感心するのであった。

「素晴らしい。ここまで学んでおられるとは

「有り難うございます。そう言って頂けると」

やはり彼も嬉しいようであった。それが顔にも出ていた。善良そのものの笑みでありとても悪そには見えない。それが彼の本当の心であった。

「私も有り難いです」

「しかし」

司祭はここで彼に対してもつのであった。穏やかな顔を深刻なものにさせて。

「何時までこの街におられるのですか？」

「この街は貴方にとってあまりにも危険です」

その深刻な顔で彼に対して言つ。

「街の人々は偏見から貴方を魔術師だの悪魔の使いだの決めてかかっています。このままでは」

「そんなことは構いません」

司祭の言葉を受けても老人は言葉を変えないのであった。その穏やかな笑みで彼に対して答えてきたのであった。

「私にとっては」

「何故ですか！」？

思わず顔を顰めさせて老人に問うた。

「このまでは何時か」

「私は確かに暖かい言葉が好きです」

それが嫌いな者などいない。やはり誰でも暖かい言葉が好きなのだ。それは何故かというと人は暖かい中で生まれそれを愛するのが習性だからだ。

「ですが」

「ですが？」

「それでも。私は」

彼は言つ。

「この街を見て思つたのです」

「この街ですか」

「最初にこの街に来た時に私は言葉を失いました」

穏やかな笑みが消え真剣で尚且つ寂しい顔になつてゐた。深い悲しみの顔であつた。

「病に侵され為す術もなく死んでいく人々。親の手の中で死んでいく子供達」

歐州では衛生觀念の欠如を主な理由として多くの疫病が流行つた歴史がある。とりわけペストでは人口の三分の一が死んだとさえ言われているのだ。

「それを見て私は思つたのです。彼等を救わねばと」

「それでですか」

「そうです」

「それこそが彼がここにいる理由であつたのだ。

「ですから。私はここにいるのです」

「ですが」

しかし司祭はその老人に対してまた言つのだつた。言わずにはいられなかつた。

「その街の人々は貴方を嫌い憎んでいます。現に今までも」「ええ」

何があつたのかは他ならぬ彼が最もよくわかつてゐることであつた。表情を消して頷いてきたのであつた。

「わかつています」

「石を投げられるのはいつものことだ」

それが普通であつた。

「武器を手に襲い掛かられたことも何度もありましたな。今にしろ」「またあつたのですか」

「はい、そうです」

正直に先にあったことを述べた。

「一刻も早くこの街を去られることがあります。パリならば教養のある貴族も多く、」

「しかしです」

だが老人はここでまた言うのであった。

「しかし？」

「そうです。この街には今も疫病があります」

「ええ」

その通りであった。この街もまた甚だ汚く疫病がある。それを広めているのがこの老人であると言わっているのだ。真相は殆どの者が知らうともせずだ。

「ですから。それをなくすまでは、  
去らないと仰るのですか？」

「そのつもりです」

穏やかだが固い決意がそこにはあった。

「どうか。それを御聞き下下さい」

「あまり。お勧めはできません」

司祭は首を横に振つてこいつ答えた。

「このままでは貴方は、

「そうですか。ですが私は、

「何があつても。宜しいのですか？」

「元より覚悟のうえです」

また穏やかな笑みを見せて司祭に答えてみせってきた。

「私が正しいかどうかは。神が御存知ですので、

「そうですか？」

「司祭様」

ここに今まで黙つていた少年が司祭に言つてきた。やはりその顔は穏やかで目の光も澄んだものであった。

「先生は本物です」

「本物なのかい？」

「はい、そうです」

その曇りのないはつきりとした声で司祭にも答えるのであった。

「これ程素晴らしい方は他におられません」

「それはそうだ」

これは司祭も認めるところだ。はつきりとした言葉に元々感じができる。

「だからだ。私も今こいつしてお邪魔させてもうひとつしてくるのだよ、

「有り難うござります」

「しかし。だからこそ言つのだ」

また司祭の顔が真剣なものになつた。切実な声で老人に対してもうのである。

「貴方は。一刻も早くこの街を離れるべきです  
「どうしてもですか」

「そう、本当にそうするべきです  
「どうして」

あくまでそう勧める。それもこれも彼のことを本当に思つているからこそである。司祭は老人のことを心から心配しているのである。

「馬車でも何でも私が用意しておくから」

「非常に嬉しい御言葉です。ですが」

「それでも。駄目なのですか」

「はい。私もまた考えがありますので」

やはりこう言つて受けようととはしないのであつた。

「お許し下さい」

「例え何があつてもですか」

「ですから。それもまた覚悟のつえですので」

彼の考えはどうしても変わらなによつてあつた。穏やかな顔の中には確かに決意さえあるのであつた。揺るぎない決意が。

「申し訳ありません」

「そうですか」

司祭はその言葉を受けて口を開いた。それから静かに述べるのであつた。

「わかりました。それでは」

「はい」

「御自身の道を歩まれて下せ」

「いつまづしかなかつた」

「貴方の思われるよう」。それが道なのですから

「すいません、それでは」

「まさか。貴方の様な方がおられるとは」

司祭はそのことに感激さえしていた。神に仕える者であつてもそ

の心は穢れきり、蓄財や権勢、美女を追い求める輩ばかりであったからである。この時代の教会の腐敗は目を覆わんばかりであった。司祭もそのことは実によく知っていたのである。教会にいるからこそ。

「ですから。身辺には御氣をつけ下さい」

「はい」

「僕も先生を御護りします」

少年も言つてきた。

「何があつても」

「頼む。君がいてくれるだけで非常に有り難い」

司祭は彼にも声をかけるのであつた。

「だから。本当に頼むよ」

「わかりました」

彼等の誓いはささやかであつたがしつかりとしたものであつた。

そのしつかりとした誓いはそのまま彼等の胸に残つた。それから暫くは「これ」といつて騒ぎもなく老人達も静かに暮らしていた。だがある日街に大雨が降つた。

「珍しいな」

司祭は教会の窓からその激しい雨を見て呴いていた。

「ここまで激しい雨が降るとはな」

「最近あまり降つていませんでしたし」

彼の助手を務める若い修道僧が彼に言つてきた。

「それを考へるとこれは恵みの雨ではないでしょうか」

「恵みのか」

「はい、かつてマナを降らせ給つたよつ」

「ここで聖書の言葉が出た。

「この雨もまた」

「そうだな」

司祭はその若い助手の言葉を受けて微笑むのであった。

「水がなければ作物も育たぬし

「我々の飲む水もありません」

「それを考えれば恵みだな、確かに」

「これこそ神の御業です」

「いつも言つのであった。」

「ですから。素直に喜びましょう」

「わかつた。では今日は静かに聖書を読むとするか」

「ええ。それでは」

修道僧は司祭の言葉を受けて微笑んできた。

「そのように」

「うむ。それではな」

彼等は静かに雨の中を過ぎていていた。やがて雨も止みまた太陽が顔を出すようになった。するとここで異変が起ころのであった。疫病がさらに広まつたのだ。まさに街全体に。倒れ伏しそのまま事切れる者が次々に現われ街は地獄絵図となつた。老人はすぐに少年を連れて彼等の治療にあたつたがここでまたおかしな噂が何処からか出て來たのであつた。

「あの爺のせいだ！」

「あいつが疫病を流行らせたんだ！」

そう言い出す者達が出て來ていたのだ。

「俺は見たんだ！あいつが井戸に毒を流すのを！」

「何つ！？」

井戸に毒を流したという噂に多くの者が反応した。

「雨の日にあいつが一人外に出て！毒を入れていたんだ！」

「それは本当か！？」

「ああ、本当だ！」

噂話の常で根拠なくこう言われるのであった。

「井戸だけじゃない！川だつて！」

「川にもか！」

「俺達だけじゃなくて農作物にも何かしようとしていたんだ！俺は見たんだ！」

「おい、それだと大変だぞ！」

「そうだ！」

話はさらに大きくなつてきていった。まるで燎原の炎の如く。

「あの爺はやっぱり魔術師だつたんだ！」

「悪魔だつたんだ！」

「ひつうことになつてしまつた。

「殺せ！殺すんだ！」

「さもないと俺達が！」

話がまたこうした流れになつてしまつた。司祭はそれを聞いて慌てて老人の家に向かう。家にいるのは彼だけで少年の姿は見当たらなかつた。

## 第四章

「彼は」

司祭は息を切らしながら家の中を見回して少年を探す。しかし彼の姿は何処にもない。

「事は一刻を争うといつのに」

「隣の街に薬を買いに行かせました」

「薬ですか」

「戻るのは後です」

「わかりました。隣街ですね」

司祭はその言葉を聞いて頷いた。それからすぐに老人に顔を向けて言つ。

「すぐに。お逃げ下さい」

「この街からですか」

「そうです。もう誰にも止められません」

彼はそう老人に告げた。

「騒ぎを抑えることは。ですから」

「ですからそれは」

しかしここでも彼は司祭の言葉を受けよつとはしないのであった。「できないのです」

「今もですか」

「そうです。これもまた運命です」

彼は今この事態に陥つても穏やかな声のままであった。その顔もまた。

「ならばそれを受けるだけです」

「受けてそのまま殺されようともですか」

「はい」

また司祭に答えた。

「そうです。それだけです」

「もう馬車も用意してあるといつのこと」「馬車は。いりません」

それもまた断るのであった。静かに。

「返して下さい」

「そうですか。では先生」

「ええ」

また司祭の言葉に応えてきた。

「このままここに留まるのですね」

「そうです。ですが彼にお伝え下さい」

あの少年のことであった。

「何をでしょうか」

「これから何があろうと」

老人は司祭に伝言を述べはじめた。

「人を助けていって欲しいと。それを

「それを伝えて欲しいのですね」

「ええ。それに」

さらに言葉は続いた。

「誰も怨まないよう」と

「怨みを捨てよと

「そうです。怨みは何も生み出しません

それがよくわかっている言葉であった。老人は賢者であった。だがその賢者が今いわれのない偏見によつて、司祭はそれが無念でならなかつた。だからこそ今こうして口ウ神野伝言を聞いていた。それを一人残される少年に伝える為にであった。彼も覚悟を決めていたのだ。

「だから。それは持たないよ」と

「わかりました。それではそれもまた

「それでいいです」

老人はここまで話し終えると言葉を止めるのであった。

「私は。これさえ伝えて頂ければ

「思い残すことはありませんか」

「はい。何も」

「」でも静かに答えた。既に遠くから猛り狂つた声が聞こえてくる。

「あそこにまだいるぞ！」

「殺せ！」

「遂に。来ました」

司祭はその声の方に顔を向けて叫んだ。

「彼等が」

「では司祭様」

老人は司祭に対し告げた。

「これでお別れですね」

「ええ。残念ですが」

「それもまた運命です。では裏口から

「はい。では彼には」

「お伝え下さい」

これが老人が司祭に最後に話した言葉であった。司祭が家を出るとすぐに扉が閉まる音がした。もうそれからは何の音もしない。ただ怒り狂つた群衆の言葉が聞こえるだけであった。司祭はその彼等のところに向かう。既に無理だとわかっていても。それでも。

「止めるのだ！」

「無理だ！」

彼等はもう司祭の言葉を全く聞こようとしない。

「あいつのせいでもた多くの人が死んだんだ！」

「今度こそ一殺してやる！」

めいめいその手に斧や鎌、鍬を持っている。普通に彼等の家にある農具が武器になっていた。禍々しい光を放つて上に向かっていた。

「そうして！これで！」

「悪魔がいなくなるんだ！」

「悪魔か」

司祭はその彼等の顔と声を見て気付いた。老人を悪魔だと罵る彼等の顔こそが。最早完全に悪魔のそれになっていたのだった。彼等は気付いていなかつたが。

「それはここにいる」

「そうだ！ここにいる！」

「司祭の言葉も正常には聞けなくなつていた。

「あそこに！だから！」

「火はあるぞ！」

誰かが叫んだ。

「悪魔を焼き殺す日が！」

「ああ、そうだ！」

それを聞いてまた誰かが叫ぶ。

「焼き殺せ！」

「骨一本残さずにだ！」

司祭は既に後ろから押さえられている。それで動けないようになっていた。

## 第五章

「司祭様はこちらへ」  
「どうか悪魔を倒すのを見ておいて下さい」  
「そなた達はわかっていないのだ」  
彼は俯いてその彼等に言うのだった。  
「何処に悪魔がいるのか。全く」  
「ですから悪魔はあそこにいます」  
「そうです」  
老人の家を指差しての言葉であった。  
「今からその悪魔も炎で」  
「焼き尽くされます」  
「本当の悪魔の姿は近くにある」  
司祭はそれでもこう呟くのであった。  
「だがそれに気付く者は。いない」  
「さあ、いよいよだ！」  
「火が点いたぞ！」  
遂に老人の家に火が点けられた。  
「これで悪魔も終わりだ！」  
「疫病も終わる！」  
醜い、憎悪に満ちた顔での叫びがなおも続く。  
「不幸はこれで消えるんだ！」  
「俺達の手で！」  
「いや、終わらない」  
司祭はまた呟いた。  
「それどころか。これからも」  
その彼の目の前で家が燃えていく。瞬く間に紅蓮の炎に包まれ全てが赤の中に消えていく。家のシルエットが深く出ているがそれもそれだけであつた。バチバチと音を立ててているそれは死そのもので

あつた。憎悪の炎により燃えているのであつた。

次の日。少年が街に帰つて來た。司祭はその彼に老人の伝言を伝えるのであつた。

「人の為にですか」

「そうだ」

司祭はまた彼に告げた。

「そう言つておられた」

「そして人を怨むなど」

「怨みは何も残しはしない」

その言葉も告げる。

「そもそも言つておられた。私にそれを伝えて欲しいと」「わかりました」

少年は話を聞く間じつと正面を見据えていた。そこには完全に焼け落ち廢墟となつた家があつた。もうそこには誰もいなかつた。

「その言葉。ずっと憶えておきます」

「そうか。それがいい」

司祭は少年が頷いたのを見て静かに微笑んだ。

「そうしてくれればあの方も喜んでくれるよ」

「先生は立派な人でした」

泣いてはいない。だが声が泣いていた。

「ですから。僕も」

「それでこれからどうするんだい？」

「司祭はあらためて少年に尋ねた。

「先生はおられなくなつたけれど」

「他の街に行きます」

少年はこう答えた。

「他の街で。人達を助けたいです」

「やはり。この街にはいられないか」

わかつていたが。それを言わずにはいられなかつた。

「仕方ないな、それは」

「けれどそれはこの街の人達を怨んでではないです」

少年はそれは否定した。

「ただ」

「ただ？」

「この街にいたらあまりに悲しいので」

それが少年の答えであった。

「悲しいのかい」

「先生のことを思い出しますから」

やはり泣かない。しかし声は泣き続けていた。彼の心が。

「だから。もう」

「どうか。では頑張るのだよ」

司祭はその彼に優しい言葉をかける。せめて言葉だけでもと考えての気遣いであった。

「何処へ行つても」

「はい。ではこれで」

そこまで言うともう立ち去りつとした。

「さよなら」

「あっ、待つてくれ」

だが司祭はその彼を呼び止めた。そうして彼に金を渡そうとする。

「少しだが。旅の金に使つてくれ

「司祭様・・・・」

「よかつたらだ。私からのせめてもの気持ちだと想つてくれ

そう言って彼に渡すのだった。彼の心を。

「それでいいね」

「宜しいのですね?」

「うん、いい」

はつきりと告げた。

「私の気持ちだから」

「わかりました。御気持ちでしたら」

彼も受け取るのであった。これは司祭が完全に好意で言つている

とわかっているからである。そうでなければ受け取らないつもりであつたのだ。

その金を受け取った。そのままでもまた言つ。

「有り難うございました」

「では元氣でね」

「はい、司祭様も」

「私はこの街に残るよ」

「そうなのでですか」

「これからどうなるかわからないが」

街を見回す。街は機能のことが嘘のように静まり返つてゐる。彼はそのことを内心悲しく思つていたのだがそれは口には出さずにまた少年に言つのであつた。

「そうさせてもらうよ」

「わかりました。それではまた

「機会があればまた会おう」

「はい」

じつして少年は街を後にした。その後彼が何処に行つたのかは誰も知らない。噂ではパリに行きそこで多くの人達を助けたという。司祭はそれを聞いて嬉しく思つていた。誰もいなくなり疫病に喘ぐ街の中にあつて。そのことにせめての慰めを見出していたのであつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0436e/>

---

群衆

2010年10月8日15時59分発行